

土佐のわらべ

第421号《第443回（2016. 12. 8） 子どもの本の読書会記録》参加者4人・文書参加1人

「私の好きなクリスマスの本」

今月の読書会は、どんなクリスマス本に出会えるかな？と、ワクワクしながら参加しました。とても一冊に絞れないと何冊も紹介してくれたり、ひとつのお話の色々な訳を紹介してくれたり、本当に沢山の本に出会えました。その中から、これこそ私の一番を紹介します。

『グロースターの仕立て屋』

ビアトリクス・ポター/さく・え 福音館書店
イブの2～3日前に、仕立て屋のおじいさんは、風邪をひいて寝込んでしまいます。クリスマスの朝迄に、市長の婚礼衣裳を仕上げなければならないのに…。それを助けてくれるのはネズミ！飼った猫に捕まっていたのを助けてくれたお礼です。おじいさんのかわりにチクチクと仕上げる姿はとても可愛い。ただ、猫の腹いせで糸が足りなくて困ったのですが…素晴らしい衣裳を作ったおじいさんは裕福になります。何と、このお話は実話が元になっています。勿論、縫ったのは、人間の弟子ですが！クリスマスシーンは無いけれど、みんなが楽しいクリスマスを迎えることが出来て良かったねと思わせてくれるお話です。

『くるみわり人形とねずみの王さま』

E・T・A・ホフマン/作 リスバート・ツヴェルガー/画 富山房
少女が、クリスマスに助けたくるみわりにプロポーズされて人形の国の王妃になるというお話です。バレエのくるみわり人形で有名ですが、本を読むともっと広くて深い世界が描かれています。物語の中で物語が描かれるという入れ子のような形で不思議な世界が味わえます。ドイツの村のクリスマスの様子も楽しめます。色々な訳や絵本が出ていますが、ツヴェルガーの挿絵のこの訳が一番のお気に入りとのこと。

『ウサギが丘のきびしい冬』

ロバート・ローソン/作 あすなろ書房
うさぎのジョージとお父さん、お母さんの住む丘の秋と冬が描かれています。春に丘の空き家に住み始めた人は動

物好きの良い人だったのに、家主の留守にきた管理人は動物嫌いでケチで犬までいます。厳しい冬がやって来るといのに火事が起こり、丘からは次々と動物がいなくなります。残ったのは、ウサギ一家のみ。でも、クリスマスプレゼントのおかげで無事に冬を乗り越えられるのです。このお話は、動物が変に擬人化されて無くて動物好きには、たまらない本です。春と夏を描いた『ウサギの丘』と2冊合わせて読む事をお勧めします。

『ゆうぐれ』

ユリ・シュルヴィッツ/作 あすなろ書房
冬の夕暮れの中を歩く犬を連れた男の子とおじいさん。だんだん日が暮れ空は暗くなるのですが、街には明かりが灯っていき、クリスマスの飾りがキラキラ光ります。夕暮れから夜へと交代する様子が丁寧に描かれているからこそ、クリスマスの夜の街が華やかにみえます。クリスマスのワクワク感が盛り上がっていく、そんな所がとても好きとのこと。

『お祭りにいけなかったもみの木』

市川里美/作 偕成社
もうすぐクリスマス。もみの木たちはお祭りにどんなドレスを着るのかという事に夢中です。小さなもみの木は仲間に入れられません。やがて、仲間達はいなくなり、残されたのは、小さなもみの木と曲がった年寄りの木だけです。でも、小さなもみの木達は、素敵なドレスを着てクリスマスを迎える事が出来るのです。
私が子どもの頃の50年近く前、山から木を切ってきてツリーを作った事があります。その時はとても嬉しくて嬉しくて。でも、クリスマスが終わった後とても切ない気持ちになりました。この本に出会ってからは、この季節になると“森に残されて良かったね”“綺麗なツリーになれて良かったね”と思いつつ必ず読み返します。

12月の楽しみは、クリスマス本を積み重ねて読む事。先ずは読書会で出会ったお話を温かいコタツで読もう！

(R. S)